学ぶ意義を見いだす古典学習指導

―「学びに向かう力・人間性等」を育成するために―

大　澤　由　紀

要旨　新学習指導要領では「知識及び技能等」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力・人間性等」の三つの柱が育成すべき資質・能力として整理された。「学びに向かう力・人間性等」の根底には学習者自身の学ぶ意義についての認識であると考える。特に学習者にとって遠く感じられやすい古典学習において、学ぶ必要性を認識し、学習に取り組むことは学びを推進していく大きな力となるだろう。古典が自己を形成する上でどのような役割を担うのか、将来、社会や自分自身の生活をどのように豊かにしてくれるものなのか、自らにとっての学ぶ意義を見いだすことは目前の学習を促進していくだけではなく、生涯にわたって古典に親しみ、古典から享受し、価値創造していく動力となるものではないか。そのような学ぶ意義を見いだす古典学習指導のあり方について、学習材、単元の構築、問いについて、授業実践を通して提案することが本研究の目的である。

キーワード　学びに向かう力・人間性等、主体的に学習に取り組む態度、古典、学ぶ意義、学習材、単元

Ⅰ　はじめに

1　研究の背景

来年度から新学習指導要領が完全実施される。「知識及び技能等」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力・人間性等」と三つの柱で育成すべき資質・能力が提示され、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた手立てが講じられている。三つの柱のうち、前者二つは知的活動についてである。そして後者一つに関しては心構えや学びを推進していくための意志、気持ちの部分である。言い換えれば、学ぶ活動、知的活動を方向付けたり、推進したりする原動力を担う要素であるといえる。この要素は「主体的に学習に取り組む態度」とも言い換えられる。平成３年に評価の筆頭項目に取り上げられた「関心・意欲・態度」において、挙手の回数や板書などの性格や行動面の傾向が一時的に表出された場面を捉えて評価していたことが指摘され[1]、今回の文言に変わったが、本来あるべき学びをどのように稼働させていくか、という知的活動のエンジンとなり、舵取りを担う要素であるということの強調である。

自らの課題を解決した先に、さらなる課題を見いだす喜びや、知的探索自体を楽しむ内発的な動機付けについてももっと目を向けていく必要があろう。多少の困難をはねのけてでも、学びに向かおうとする力、学習意欲や学びへの飽くなき探究。これらの力を伸ばすためにどのような手立てを行えるのか。また、どのような学習材が有効に働くのか。単元を構築する際の留意点は何か。これらの問題意識を突き詰めるために、本研究を行っていく。

特に実践対象として選んだ領域は古典である。高校生の約７割が古典の学習に意義を感じないと答えたアンケート調査[2、3]の数値に驚かされたのはもう何年も前の話ではあるが、現在もどれほどの学習者が自分の言葉で古典を学ぶ意義について語れるであろうか。過去とのつながりが希薄となってきている現代において、古から学ぶことの意義を考え、自分の言葉として語ることは「学びに向かう力・人間性等」を育むことにつながるのではないか。そう考え、古典を学ぶ意義を語り合う実践をいくつか行った。この実践を通して、学ぶ意義について自ら認識し、自覚させることにより、学びを方向付け、稼働させる要素である「学びに向かう力・人間性等」（主体的に学びに取り組む態度）を活性化させるためにどのように働くのかを考察していく。

Ⅱ　研究の目的と方法

1　研究の目的

本研究の目的は、学ぶ意義について自ら認識し、自覚させることにより、学びを方向付け、稼働させる要素となる「学びに向かう力・人間性等」（主体的に学びに取り組む態度）を活性化させるためにどのように働くのかを考察することにある。また、学習活動を振り返り、学ぶ意義を語り合うのに適した手立てや学習材、単元の構築について、実践を通して考察する。対象領域は学習者が身近に感じることが難しい古典学習とすることとする。

2　研究の方法

古典を学ぶ意義について語り合う時間をもうけることで、「学ぶに向かう力・人間性等」（主体的に学習に取り組む態度）の育成につながるのではないか。これを検証するためには古典の学習活動そのものを振り返ったり、中学校義務教育課程で学習材として教科書に掲載されている意義について考察を加えたり、社会の中での享受のされ方を知ったりする必要がある。そこで以下のように研究の方法について段階を経て行っていくこととする。

まず、「学びに向かう力・人間性等」の育成と学ぶ意義の自覚について述べた先行研究と古典を学ぶ意義についての自覚と学習の活性化について述べた先行研究にあたる。

続いて、学習者が古典を学ぶ意義についてどのように見いだしていったのか、実践を通して述べる。その手順は以下の通りである。

⑴　学習材について

⑵　学びを振り返る対象とした学習活動（単元）

⑶　学習者の見いだした古典を学習する意義

そして最後に、古典を学ぶ意義を見いだし、語り合う時間を設けたことが「学びに向かう力・人間性等」の育成とどのように結びついたのかを考察する。

Ⅲ　研究の内容

1　先行研究

⑴　「学びに向かう力・人間性等」の育成と学ぶ意義の自覚

佐伯胖[4]は「人は、学びがいを求めて、学ぶ」ということを原点に論を述べている。そしてこれは「自分探しの旅」とも言い換えられる。「ここでいう「本当の自分」とは今あるこの私そのものではない。この私が成長し、発展し、育っていくべき自分―むしろ、これから私がなっていく自分―が何であるかを探し、自分自身を転身させていこうとしている」「本来は学び手本人が」見出していくものであると述べている。また、「第二の自我というのは、学びの発達に読み替えると、それは「学びがい」を求める中で探している一学ぶことでつくられることが期待される一「本当の自分」なのである（中略）現時点でとりあえず、かりに「なってみたい、もうひとりの私」であり、それが「現在の私」をいろいろと補助し、助言し、ときにやさしく批判し、反省をせまり、変身をせまるのである。」とある。自己内対話の中で、自分自身を客観的に見つめ、理想の自分に一歩ずつ近づけてくれる存在を自分の中や他者に存在させる意義について述べている。稿者はこの第二の自我を自覚させる学びを随所に入れることにより、学びを促進したいと考えている。

指導と評価の一体化について「学びに向かう力・人間性等」を見取る場合、自己調整力と粘り強さを観点とすることが明示された。この自己調整力とは三宮真知子[5]によると次のように説明されている。「Bandura（1971）は、報酬などの強化が他者から与えられなくても、学習が観察によって成立すると考えたのである。（中略）また、自己効力とは、課題を達成するための自分の能力に対する期待である。「自分は、この課題ができるだろう」という期待を持つことが努力を持続させ、課題達成に良い影響を及ぼすのである。自己調整学習は、自己効力に支えられ、他者や自分の学習行動を観察しながら進められる。」ここにも期待という言葉が見られる。稿者は課題に対する期待だけではなく、課題そのものを遂行することがもたらすかけがえのない効果について学習者が自覚することも自己調整や自己効力感と密接に関係すると考えている。

⑵　古典を学ぶ意義についての自覚と学習の活性化

古典学習を学習者に根付かせたいといち早く、意識化に取り組んだのが大村はまである。単元学習の前に、古典を学習する意義について書かれた現代文（谷川徹三「古典に関する文章」）を読ませ、テーマ設定に基づく古典資料の多読、その中から解釈、意味付けし、古典と自己とのかかわりについて考察することによって古典に親しむ学習を具現化している。稿者は大村はまに多大なる影響を受け、単元学習を構築している。しかし、学ぶ意義を見出すのは、学習を行ってから数回にわたって行うことにしたいと考えた。自分自身が何を学習材（作品）から見出すのか、学習過程から見出すのかを重視したいと考えたからである。

また、大村はまの古典単元学習について坂東智子[6]の論文に詳しく述べられている。

2　学ぶ意義を見いだすために

⑴　学習材について

今回、学習活動を振り返る対象とした学習材はすべて、教科書（光村図書『国語２』）所収の『枕草子』『徒然草』『平家物語』の三つの作品である。この三つの作品は、所収章段は違えども、どの教科書会社でも採用されている作品である。中学２年生で必ず学習する学習材といえるこの三つの作品を対象に古典を学ぶ意義を見いだし、語り合うことに意味があると考え、語り合うための学習材として設定した。以下二つに分けて学習材を考察する。

①　随筆教材

随筆は内省・自照文学であり、観察眼の鋭さや切り口の面白さ、洞察の深さなど、筆者独自のものの見方や考え方に触れる楽しみがある。平安時代の女流文学隆盛期に書かれた『枕草子』。内省文学の萌芽期に筆者が取り上げ、書き残すために選んだ対象は何だったのかを読むだけでも現代に生きる我々に示唆を与えてくれる。また、遁世し、隠者生活を送る兼好法師が書いた『徒然草』には人間洞察が豊富に描かれている。権力と一線を

画して生まれた人間や社会を鋭く批評する目。この作品からも単に教訓だけでなく、人はどういきるのかという哲学的命題を与えられる。このような二つの随筆教材を通して、学習者自身が古典を学ぶ意義をどのように掬いあげていくのか、またそこから読み取ったものをいかに生きていく上での糧としていこうとするだろうか。中学２年生という発達段階とも踏まえて実践から考察していくこととする。

②　『平家物語』

『平家物語』はその成り立ちからして、特異である。語り物として、人々に語り聞かせ、聴衆とともに発展してきた民衆エンターティンメントである。戦乱、武士の生き様（死に様）を描いた軍記物語であり、そこには生死の狭間の決断や覚悟、運命に翻弄される生き様、多くの死を経験したものの悲しみの中での生きる選択など多くの群像ドラマが展開される。先の随筆文学とは異なり、一読者（聴衆）として息をのみながら人々の心情に心を馳せることのできる作品である。運命や人生、誇りや愛についても深く考えさせられる。

庶民が引き継いできた文学として、日本人の気質、グローバルな視点から見た日本人のアイデンティティについて考えさせることもできる。

これら三つの作品から、何を学ぶべきなのか。学習活動を振り返りながら古典を学ぶ意義について語り合うことで見いだしていく方法をとった。

⑵　三つの単元

古典を学ぶ意義を語り合う上で、振り返る対象とした三つの単元について詳細を述べる。

①　古典随筆における筆者の見方・考え方　その１
～『枕草子』『徒然草』二つの書き始めを比べる～
対象：千葉大学教育学部附属中学校２年Ｃ組　38 名
時期：令和２年６月～　全４時間
目標：古人のものの見方や考え方にふれ、古典を学ぶ意義を語り合おうとする

〈単元の実際〉

『枕草子』第一段と『徒然草』序段を読み比べ、筆者のものの見方や感じ方について意見を述べ合った。

『枕草子』第一段では、目を向けている対象、感じ方、書き表し方について論じた。四季の特徴を感じさせる時間の設定、折々の風物を対比させ、構造的に述べる手法、身近で見落としがちなものへの眼差しに「をかし」の感性と称される鋭い見方や考え方、美的センスや表現の工夫を見いだしていた。（１時間）

『徒然草』序段では『枕草子』の跋文を配付し、「目に見え心に思ふことを」（跋文）と「心にうつりゆくよしなしごとを」（徒然草）、「つれづれなる里居のほどにかき集めたるを」（跋文）と『徒然草』という書名にについて考えを巡らせるとともに、「あやしうこそものぐるほしけれ」（徒然草）の記述を取り上げ、書くことに対する筆者の思いについて考えを述べ合った。（１時間）

更に『徒然草』「仁和寺にある法師」を読み、『枕草子』と書き方を比べた。（１時間）

最後に、古典を学ぶ意義について二つの作品から考え、語り合った。（１時間）

②　古典随筆における筆者の見方・考え方　その２
～『枕草子』『徒然草』の四つの章段を比べる～
対象：千葉大学教育学部附属中学校２年Ｃ組 37 名
時期：令和３年１月～　全２時間
目標：古人のものの見方や考え方にふれ、古典を学ぶ意義を語り合おうとする

〈単元の実際〉

教科書（光村図書『国語２』）資料に収録されている「古典の世界を広げる」を学習材とし、四つの作品から筆者の見方考え方についてその特徴を語り合うこととした。取り上げられている章段は『枕草子』第二百三十七段「雲は」、第百四十五段「うつくしきもの」、『徒然草』第五十五段「家の作りやうは」、第百七段「友とするに」である。この四つを比べながら、筆者のものの見方や考え方、ものの述べ方について考察していく。考察する際の観点として①筆者が取り上げた対象、②述べ方について見ていくように支援した。（１時間）

次に随筆というジャンルについて触れ、筆者のものの見方や考え方、独自の感性、ものの述べ方を取り上げながら、古典随筆として二つの作品を学ぶ意義について語り合う場を持った。（１時間）

③　『平家物語』完全ガイドブック製作
対象：千葉大学教育学部附属中学校２年Ｃ組　38 名
時期：令和２年 11 月～　全７時間
目標：〇軍記物語の特徴を生かして朗読し、作品の人物を紹介し、古典の世界に親しむ
〇古人のものの見方や考え方にふれようとする

〈単元の実際〉

『平家物語』の全体像を吉村昭『平家物語』、角川ソフィア文庫ビギナーズクラシックス『平家物語』、千明守『平家物語が面白いほどわかる本』から読み、一人物を特定して一人一ページ文のガイドブックを担当する。38 人のページが集まり、学級で一冊のガイドブックにするというものである。学習活動の概要を知り、担当人物を選定した。（１時間）なお、『平家物語』の全体像については本の貸し出しを許可し、授業時間外で読んでくる生徒が多かった。

次に、製作の手引きとして、ガイドの１ページに盛り込むべき観点（ⅰ選定した人物の描かれる場面設定、背景の説明（平家が隆盛を誇っていた時期、都落ちを決断した時期、源氏に追い詰められて海に逃れた場面など）、ⅱ人物相互の関係の説明（平家方か源氏方か、誰とどのような関係であったのか、どのような立場で出陣していたのか、など）、ⅲ人物の描かれ方、原文の抜粋と説

明（原文を抜粋し、朗読 タブレットで録画し、映像も資料としてガイドブックの一部とする）、ⅳ人物、場面をどのように感じるか、考えるか（学習者の人物評、その人物を選んだ理由、感想、編集後記、など）、ⅴその他コラムや豆知識など製作者の創意工夫、趣向で様々な記事を盛り込んでよい）について、平敦盛で見本を提示し、イメージを喚起した。（１時間）

観点に沿って、情報収集するとともにガイドブックを作成していった。その際、取り上げた人物の最も伝えたい点、取り上げた場面の見所、古典原文の引用理由について効果的に伝わる情報の構成を考えるための編集会議を随時取り入れていきながら、まとめていった。（４時間）

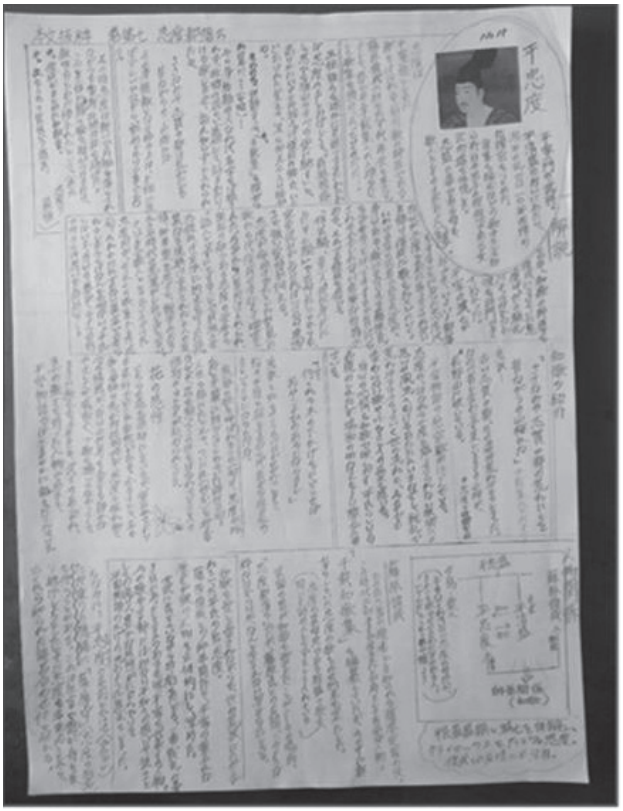

写真１　平忠度都落ちのガイドページ

この生徒は平忠度を選定し、ガイドのページを製作した。忠度の歌人としての側面と平家の武将としての側面を対比させながら、心の葛藤をまとめている。忠度の作った和歌を二首、比較しながら紹介することで、花に託して表現しようとした故郷への思いや散りゆく命にスポットを当て、歌人としての才を伝えている。都を去る上で、命がけで自作の和歌を師の藤原俊成に託し、戦場へと戻っていく武者としての姿と散っていくであろうことを予感しながらも、千載和歌集に掲載することを約束する師弟の関係が様々なエピソードをもとに紹介されている。人物関係も相関図を用いて、清盛との関係、歌人である母、俊成との師弟関係がわかる図となっている。

最後に古典原文を引用した箇所の朗読をタブレットで撮影した。今回の単元名を完全ガイドブックとしたのは、学級で『平家物語』の全体像が把握できるよう、38 人がそれぞれ一人ずつ分担してガイドされていることとともに、語りの文学である『平家物語』の音声表現としての要素も盛り込んで完全となるという意味合いがある。朗読の練習と録画を行い、データを提出するまでを行った。（１時間）

授業外ではあるが、編集委員を有志で募り、冊子としての順番や構成などの編集作業を指導者とともに行った。（放課後３回）

また、ガイドブック製作が終了した時点で、上級生である３年生に、自分の担当した一人物の説明を一対一で、５分間４人に対して行っている。お返しに３年生からは日本三大和歌の数首を選び、和歌の鑑賞の仕方についての説明を受けている。（コロナ感染に配慮し、３カ所に分けて１３人ずつでの実施とした。）

⑶　学習者の見出した古典を学ぶ意義

三つの単元を通して、学習者は古典を学ぶ意義について考えを深めていった。各単元を振り返りながらどのような意義を見出していったのか述べていく。

①　古典随筆における筆者のものの見方・考え方　その１・その２

この二つの単元は異なる時期に実践したものではあるが、二つとも『枕草子』『徒然草』について比較しながら、随筆というジャンルを意識して古典を学ぶ意義について考え、語り合うというものであった。学習材として扱った章段は異なるが、そのねらいは同じである。そしてこれを機をずらして行ったのは、段階的に考えを深めていってほしいとの考えがあったからである。国語科という教科の特性でもあるが、螺旋的、反復的に学習を行っていくという上で、少しずつ古典随筆に慣れ親しませながら、考えを深めてほしいという思いがあった。二つの単元についてはまとめて学習者の見出した古典を学ぶ意義について考察を加えていくこととする。

まず、古典を学習する意義について、何も学習しない、まっさらな状況での意識調査を行った。そこに記述されていたものを挙げる。

・日本の伝統文化を学ぶこと。
・現代と古典の世界では感じ方が異なる。今では失われてしまった、薄れてしまった文化や表現を知ること。
・文化の変遷、進化の過程を知ること。
・語源を知ること。今に至る経過を知ることができる。
・現代にも通じる見方考え方に触れること。
・当時の歴史的背景に触れること。
・昔のことから今につながることを学ぶこと。（温故知新）

・教養を身につけるため。
・文法や表現を学ぶことで知識を増やす。
等である。中で最も多かったのが現代とは異なる表現や感じ方を知ることであった。（複数にわたって記述している生徒も多かったが、この点について述べていた生徒は２７/３６人である。２名欠席。）

古典学習というと、やはり現代と異なる時代における人々の見方・考え方に触れるという点であろう。それと並行して、現代にも通じる見方・考え方につながるという考えである。生きている時代や環境は異なっていようと、相通ずる感性や人間性の共感についても考えていた。また、知識や教養といった点に目を向ける生徒も少なからずいた。当時の時代背景が人の考えに多分に影響するため、知識事項を外すわけにはいかない。また、言葉の壁として現代は使われない古語や歴史的仮名遣いなどの読むための技能を重視する生徒もいる。「学びに向かう力・人間性等」の力として古典作品自体を読み味わう意義を見出し、自覚することで、このような「知識・技能」を習得することを苦痛に感じることがないようにしていくことが肝要であろうと感じた。

その後行った一つ目の『枕草子』第一段と『徒然草』序段との比較からの古典を学ぶ意義の見出しである。まずは、『枕草子』では日本特有の風物（雲・蛍・雁・からすなど）や時間を表す言葉、「をかし」や「わろし」といった評価する言葉に視点が向けられた。日本の四季、それを時間軸で切り取って表現する筆者の表現の美しさ。そして多様に広げられる対句的表現、文章構成の巧みさ。そして『徒然草』が『枕草子』から受けた影響について学んだあと、学習者たちは古典を学ぶ意義について考え、語った。生徒の発言を以下に記す。
・日本の良さや、独自性について考えさせられる。
・書いて残しただけでなく、その作品を読んだ人が作品の価値を見出して次の時代に伝えていったというその行為こそが大事なのではないか。→それだけ価値のある作品が残されているということ。
・古典は引き継がれる時に引き継ぐ人の考えも上乗せされる。もともとの作品の鋭い感性や巧みな表現から刺激を受けて、更にすごいものを生み出す力がある。これが温故知新ということ？

継承の意味について学習者が見出していったことがうかがえる。これは学習材の持つ力と考えてもよいのかもしれない。継承されるだけの価値を持つ作品だからこそ、そこに目が向けられていったのである。

それから６か月後に行った四つの章段の比較と、古典を学ぶ意義の見出しについては次のような記述がみられた。
・二年生というだんだん自分の考えを持ち始め、社会に出る準備をし始めたりする時期に、古典随筆に触れることで、当たり前の日常をどんな風に見ると豊かに日々を送ることができるのか知ることができる。
・昔の生活の知恵や教訓を通して生活に役立てていくために学ぶのではないか。良い随筆は自分を見つめなおすことができるものであり『枕草子』『徒然草』はその点でとても優れている。永久不滅の作品なんだと思う。
・歴史だったら社会でも学べるが、国語ではその人の心がどのように動いたのか、何を感じたのかを詳細に追うことができる。心を学ぶのが古典の意味だと思う。
・『徒然草』は三百年の時を経て、『枕草子』を踏襲して全く新しい別の作品を生み出している。この二つの作品を通して、この移り変わりの流れに自分も加わる。作者の考えを受け継ぐといった意味があるのではないだろうか。
・二つの随筆には物事をどのように見るのかという新たな視点がたくさん書かれていた。自分だけでは発見できない見方を知ることができて視野を広げられた。自分自身を振り返ったり、見る見方を多方面から与えてくれたりすることで、生きる上でたくさんの分岐点があった時にいろんな選択肢を与えてくれるのだと思う。
・古人の考え方や出来事についてのとらえ方について刺激を受け、人格形成の途中にある私たちを一つ上のグレードに上げてくれるようなものだと思う。随筆はその人自身の人格やとらえ方がよく表れている。日常の切り取り方、考える視点など刺激を受けることで視野が広がるのだ。
・『徒然草』に影響を与えた『枕草子』だが、「雲は」でもわかるように漢文の教養がある。知識も豊富だし、見方には鋭さがある。感心させられ、どうしたらこのようなとらえ方ができるのかと考えさせられる。兼好法師の教養もすごいものがあったようだ。つまりこれだけの洞察ができる人は知識も教養も持っていたということだ。そのような見方ができるために勉強して知識や教養を身につけるのだと思う。

このような古典を学ぶ意義についての見出しがあった。随筆という文学ジャンルが持つ特性がちょうど中学２年生という自我の形成期と符合していることを学習者自身が自覚し、だからこそ、多くの見方考え方に触れる必要があるということを見出している。視野の広がり、多角的なとらえ方、生きる上で役に立つと考える生徒が多くなり、さらに人間性の育成ともいえる人格形成にまで言及した生徒も見られた。また、とかく暗記に陥りがちな知識や教養を身につける意味も、単に知っていることが大切なのではなく、見方や考え方に生かしていくことこそが本当の意味での知識や教養の習得の目的なのだと考えている。

② 「『平家物語』完全ガイドブック製作」を振り返って、軍記物語を学ぶ意義

最後に、『平家物語』を学ぶ意義について単元「『平家物語』完全ガイドブック製作」を振り返りながら見出していった。これまでの随筆と異なり、軍記物語である『平家物語』は語り物としての特性も持つ。大衆に向けて、音声で表現された点は是非とも重視したいと考えた。完全ガイドブックとしたのも音声を録画（朗読し、語るという要素を重視する）し、音声表現までも含めて、ガイドとしたいと考えたからである。また、随筆と大きく異なる点は、人間ドラマを扱っている点である。人と人との関係の中で起こっていく人間ドラマが多くの人物に焦点が当てられ描かれている。多様な人物の運命、生きざま、決断が語られていく。『平家物語』をどのように受け止め学ぶ意義を見出していくかに視点をあてて振り返りを行った。

・『平家物語』は多くの人が聞き味わい、感動を分かち合った文学である。日本の大切な文化でもある。

・対比表現などいろいろと隠されていたり、昔の人たちのように話を聞いて、頭で考えたりする想像力が鍛えられる。

・この物語は「語り」で伝えられたため、響きが重視されていると感じる。また、周りの情景などを言葉で表現している。このことから、「言葉の選び方、使い方」がいかに大切なのかを学ぶことができる。それは現代の文学にもつながっているように感じる。「ひいふっ」などの擬音や様子の説明などの表現は平家物語がもとになっているものもあるのではないだろうか。

・こんなにも急成長して権力を握った人物はそう多くはないはずだ。また、これほど急転直下した平家をほかには知らない。「おごれる人も久しからず」であり、一種の教訓である。しかも古典でもあり、歴史的な事実でもある。ここから吸収できるものはたくさんあるはずだ。

・普段「生死」という概念は日々を過ごす上であまり触れることはないが、『平家物語』を通してそういった非現実的な世界、物事を知ることができる。また、『平家物語』は『枕草子』や『徒然草』とは異なり、筆者の意見や感想は書かれない。そのため登場人物の心情や場面背景などを読者が自由に想像できる。

・「敦盛の最期」では、直実は本当は殺したくなかったが武士として、たくさん味方が迫っているので仕方なく殺してしまった。結果だけ見れば直実が敦盛を殺した、ということだが、直実は敦盛の気持ちや敦盛の父親の気持ちまで自分のことのように考えられる人物だったとわかります。このような学びが『平家物語』のような軍記物語を学ぶ意義だと思います。

・私は木曽義仲が孤立した後の宇治川の合戦で今井四郎兼平との場面に着目しました。義仲は横暴な振る舞いにより仲間が少なくなってしまいました。しかし、最後の最後まで家臣を守り続けようという絆があり、人間としてのあり方を学べました。私の着目したのは一つの戦いではありましたが、たくさんの教訓や学問ではない学びがあるため学ぶのではないかと私はガイドブックを通して学ぶ際に思いました。

・死や権力が横行する世界でその中でも愛を貫こうとした人々やそれらに勝てずに悲しい結末を迎えざるを得なかった世界（無常観にもつながっていく）があったということを史実や数字以外から知ることができる。

・群像劇。たくさんの人が登場し、たくさんの人が関わって作られていく世界。当時の人々の感性が多面的で豊かに描かれている。生死や戦いの様子が登場人物一人一人のドラマとともに描かれているので、時代の全体像が浮かび上がってくる。文化や道徳観にも触れられる。また、語りの文学として耳で味わうものであり、物語の紡ぎ方に思いが巡り、五感や時代にとらわれずに自由なものだと気づかされる。一人で作るものでもない。とても長く、壮大な分、その一場面に触れてみると世の常ならん哀れや愛憎が真実味を持って迫ってくる。

・一人の人ではなく、それを聞く人々によって広まり、私たちが知るに至っている『平家物語』なので、物語を受け継ぐため。情ではどうにもならない世界の仕組みを知る意味もある。

このような古典を学ぶ意義の見いだしが行われていった。随筆にはない、ドラマ性、登場人物の心情への感情移入、語りとしての特質など、様々な点に目が注がれていった。そして、学問として学ぶものではないかもしれないが、人としての学びがあると捉え、人間としての在り方、つまり「人間性」の学びに言及する生徒が多く見られた。「学びに向かう力・人間性等」についての視点という意味でも非常に重要な点を見いだすことができたと考えている。それは、授業中の生徒の発言にも見られた。「実際にテストの点数に影響することではないかもしれないが、本来、学ぶことの意義を見いだすことは学ぶという本質を捉える重要な機なのではないか。」という意見が出された。

Ⅳ 研究のまとめ

本研究を通して、「学びに向かう力・人間性等」を涵養していくことは、学習材・単元の構築と深く結びつくことがわかった。教科書に学習材として採られている作品は発達段階的にも作品の力としても大いに学習者を刺激するものであることがわかった。また、単元を構築する際に、指導者自身が古典のジャンルにおける学びに向かわせたい根幹をしっかりと持つことが大切であると考えるに至った。今回、随筆と軍記物語という二つのジャンルを振り返ったが、振り返る単元にどのような意図があったのかは学習者たちの目には見えないところで構築されてはいるが、学習を通してじんわり

と浸透し、学習者の考えに影響するものであると感じた。だからこそ、教師が学ぶ意義について事前に思いを固めておく必要があると深く感じている。そしてその際、どのような方面からの学習者の考えや思いにも対応し、受け止められるように多様な点から考えておく必要があろう。また、そのような文献にあたっておくことや、解説、論文を時宜に応じて学習者に与えていくことも大切になる。今回、『枕草子』跋文を解説付きで紹介したり、『平家物語』に関しての書籍を５２冊用意したりしたが、これらが大きく学習者たちの考えの形成に寄与したことは大きい。

古典を学ぶ意義を見出し語り合うことを通して、学びを方向付け、稼働させる「学びに向かう力・人間性等」の力を培うことにつながったと学習者の記述から考える。古典を読むためには様々な知識が必要となる。歴史的仮名遣いや古語の意味、文法的な事項といった「知識・技能」に関すること。そして、読んだ上で筆者の見方・考え方を分析・考察したり、登場人物の心情を解釈したりする「思考・判断・表現力等」に関すること。これらの知的活動を促進するためには、そこから何を学ぼうとしているのか、学んだ先にどのように活用していくことができるのか、佐伯のいう「学びがいのある学び」にしていくための「学びに向かう力・人間性等」における自覚が必要であろうという考えからこのように学習を振り返ってみた。けれども、本来学びを促進する力となる「学びに向かう力・人間性等」であるならば、学ぶ前にそのことについての自覚があるべきなのではないか。しかし、学んでからでないとその自覚は困難である。このようなジレンマに陥った。しかし、この疑問に対しても佐伯の言説が雄弁に語ってくれる。「学びがいというものは、学ぶことの価値とか学ぶ意義のようなものへの、漠然とした希望をいだいていることを意味している。もちろん、本当の価値とか本当の意義は学ぶまではわからない。－だからこそ、これから学ぼうというわけだ。しかし何かしら「大切そうだ」とか「あとで、学んでよかったと思えそうだ」というものを期待しているのである。/ところで、こういう「わからないけれども、とにかく、何かよいことになるだろう」という期待を、あえてここで「希望」と名付けることにする。」学びへの期待や「希望」を感じられるように単元を構築すること、これが教師に最も求められる力なのではないか。学習者の学びを教師が支援するためにはいかに学びがいのありそうな言語活動を用意するのか、学習材の学びがいについて考察しておくこと、学習者の学びに向けた知的好奇心をくすぐるために文献や資料をどのタイミングで提示していくのか、そして、学習者自身が学ぶ意義を自覚していく過程を設定していくことが大切であると考える。それは教師が教えることで培われるものではないからである。どんなに教師が古典を学ぶ意義を語ったところで、「学びに向かう力」を培うことにはならない。だからこそ、学習者自身がどのような意義を見出していくのか、対話や交流、先哲の考えから自己形成していく過程を大切にしていく必要があるのだと考える。つまりは学びを通して学ぶ意義が形づくられ、そして学ぶ意義を実感しながら学び自体が促進されていく。このループのような繰り返し、相乗効果が伴うものと言ってもよいかもしれない相互関係こそが、学びを活性化していく源となるのではなかろうか。だからこそ、指導と評価の一体化を視野に入れて、学びへの活性化を図っていく必要があろう。

Ⅴ　おわりに

今年度はコロナ感染症拡大防止のための休校措置化から始まった。直接話すことが困難な時期を約３か月も経て、学校生活の再開となった。この間、学習者は否応なく自分と向き合う時間を多く持つこととなった。

学校での当たり前の日常が揺らぎ、言葉による対話が極力避けられ、人と人とのつながりやコミュニケーションについて大人も子どもも深く考えさせられた。夏休み明けに「言葉の力」について考える単元を数回にわたって行った。「言葉を学ぶ意義」「言葉が果たす役割」について社会的に取り上げられた出来事（新聞記事に掲載された１３の記事：言葉の持つ力について小中学生に呼びかけたあさのあつことそれに対しての小中学生の意見、ニュースエブリーで藤井キャスターの言葉に励まされたという記事、ステイホームを表現した高校生のポスター、など）や教科書に掲載されている随筆、評論文、論説文（大岡信「言葉の力」、池田晶子「言葉の力」、池上嘉彦「ことばのふしぎ」）など多様な情報を重ねて読み、考えを形成し、語り合う内容であった。哲学的ともいえるこの単元の根底には今回の研究で取り上げた「学びに向かう力・人間性等」の涵養がある。学習者自身が学ぶ意義を多様に持ってほしい。そして、学んだ先にどのような社会の構築や将来があるべきなのか（理想像）を掲げることが大切だと考えての実践だった。

これを古典に特化して行ったのが本研究における三つの単元の振り返りである。「学びに向かう力・人間性等」の評価は「自己調整能力」と「粘り強く学びに取り組む態度」による見取りを行うことと示されたが、どのようにその要素を育むのかは明言されていない。学ばされている状況や教えることに邁進してしまいがちな古典を対象とし、学びを主体的に行っていこうとする学習者にしていくための方途について焦点を当てた。

学習者がこの振り返りを心のどこか片隅にでも温存し、将来を生きる上での何かしらかの縁としてくれれば幸いである。

〈引用・参考文献〉

1　平成 30 年 8 月 7 日に行われた中央教育審議会　初等中等教育分科会　教育課程部会　第 7 回ワーキンググループにおけるヒアリングで「関心・意欲・態度」の評価の正当性に対する問題点として授業に真面目に取り組んでいるかどうかという態度が本来の教科・科目への意欲とすり替わっていると大学一年生から意見が出された。

２　平成 14 年 11 月 12 日 国立教育政策研究所「平成 14 年度教育課程実施状況調査（高等学校）ペーパーテスト調査集計結果及び質問紙調査集計結果」(http://www.nier.go.jp/kaihatsu/katei_h14/index.htm)（国立教育政策研究所教育課程研究センター）pp.81-85, 20042

３　平成 16 年 1 月～2 月 国立教育政策研究所「 平成 15 年度教育課程実施状況調査（小学校・中学校）質問紙調査集計結果－国語－」（ http://www.nier.go.jp/kaihatsu/katei_h15/index.htm)(国立教育政策研究所教育課程研究センター) p.1, 200

４　佐伯胖「子どもと教育　「学ぶ」ということの意味」岩波書店 1995.4

５　三宮真知子「メタ認知　学習力を支える高次元認知機能」北大路書房 2008.10

６　坂東智子「自己との関りを意識化する古典学習指導の考察―大村はまの単元学習指導「古典入門―古典に親しむ」(昭和 25 年）を中心に」平成 21 年